武蔵野日曜聖書講筵

パウロの伝道精神とテサロニケ教会との信愛関係

――テサロニケ前書第2章――

１９９２年10月４日
小池辰雄

祈り　救は神のため　召団・主属　内的霊的行為　神の生命が交流　信愛関係　預言者・使徒
ディバイン・リベンジ

【テサロニケ前2】

1兄弟よ、我らの汝らに到りしことの空しからざりしは、汝ら自ら知る。2前に我らは汝らの知るごとく、ピリピにて苦難と侮辱とを受けたれど、我らの神に頼りて大なる紛争のうちに、憚らず神の福音を汝らに語れり。3我らの勧は、迷より出でず、汚穢より出でず、詭計を用いず、4神に嘉せられて福音を委ねられたる者なれば、人を喜ばせんとせず、我らの心を鑒給う神を喜ばせ奉つらんとして語るなり。5我らは汝らの知るごとく何時にても諂諛の言を用いず、事によせて慳貪をなさず（神これを証し給う）6キリストの使徒として重んぜらるべき者なれども、汝らにも他の者にも人よりは誉を求めず、7汝らの中にありて優しきこと、母の己が子を育てやしなう如くなりき。8斯く我らは汝らを恋い慕い、なんじらは我らの愛する者となりたれば、ただに神の福音のみならず、我らの生命をも与えんと願えり。9兄弟よ、なんじらは我らの労と苦難とを記憶す、われらは汝らの中の一人をも累わすまじとて、夜昼工をなし、労しつつ福音を宣伝えたり。10また信じたる汝等にむかいて、如何に潔く正しく、責むべき所なく行いしかは、汝らも証し、神も証し給うなり。11汝らは知る、我らが父のその子に対するごとく各人に対し、12御国と栄光とに招きたもう神の心に適いて歩むべきことを勧め、また励し、また諭したるを。

13斯てなお我ら神に感謝して已まざるは、汝らが神の言を我らより聞きし時、これを人の言とせず、神の言として受けし事なり。これは誠に神の言にして、汝ら信ずる者のうちに働くなり。14兄弟よ、汝らはユダヤに於けるキリスト・イエスにある神の教会に倣う者となれり、彼らのユダヤ人に苦しめられたる如く、汝らも己が国人に苦しめられたるなり。15ユダヤ人は主イエスをも預言者をも殺し、我らを追い出し、16我らが異邦人に語りて救を得さ

せんとするを拒み、神を悦ばせず、かつ万民に逆い、斯して常に己が罪を充すなり。而して神の怒は、かれらに臨みてその極に至れり。

17兄弟よ、われら心は離れねど、顔にて暫時なんじらと離れ居れば、汝らの顔を見んことを愈々切に願いて、18（我パウロは一度ならず再度までも）なんじらに到らんと為たれど、サタンに妨げられたり。19我らの主イエスの来り給うとき、御前における我らの希望、また喜悦、また誇の冠冕は誰ぞ、汝らならずや。20実に汝らは我らの光栄、我らの喜悦なり。

●祈り

主さま。あなたは私たちの根っこであり幹であり、我々はその枝でありまた葉っぱであり花であり実であると、今、「我は真の葡萄の樹」のヨハネ伝15章で承り、有り難うございます。私たちの信交とは正にあなたに連なることであることをしみじみと感じます。どうぞ、そのようにして、観念的な信仰ではなく、本当に生命あるところの信の世界を私たちにおいて証しすることができますように願い奉ります。今日は、集まる人は少ないですが、しかし、問題は数ではありません。

どうぞ、この兄弟姉妹たちと共に、この午前の集会を、全身をもってこれに与かることができますように願い奉ります。また、それが、どうぞ、私たちを通して、隣人に伝わることができますように、お願いいたします。聖名にあって捧げ奉る。アーメン。

●救は神のため

今日はテサロニケ前書第2章です。

1兄弟よ、我らの汝らに到りしことの空しからざりしは、汝ら自ら知る。

時々、パウロは「空しい」という言葉を使いますが、まことにそれが空虚であって実を結ばないことが「空しい」ということです。

「空の空なるかな、凡て空なり」

という、旧約の「伝道の書」の最初の言葉に相通ずる字です。ところが、現代は本当に空しいことだらけで、表向きは何かでありそうであっても、実は中身がない。

それで、パウロは

「空しくはなかった」

という。「汝ら知る」は、聖書で「知る」というときには、頭で知るのではない。存在的に、人格的に、霊的に知ることです。旧約聖書では、

「アダム、エバを知る」

という、あの「知る」は、肉体的に交わることも「知る」です。聖書の「知る」という言葉は霊的にも肉体的にも同じ字を使う。ヘブライ語では「ヤーダッハ」という字ですけれ

ども。エレミヤもホゼアもよくこの「知る」という言葉を使った。言葉というものは、同じ言葉でも内容的に、福音の内容は違うから、その点は普通の意識では読まないように。

2 **前に我らは汝らの知るごとく、ピリピにて苦難と侮辱とを受けたれど、我らの神に頼りて大なる紛争のうちに、憚らず神の福音を汝らに語れり。**

「紛争」はむしろ戦いの意味です。ピリピではダメだ、と。なにしろ、コリントも勿論ダメ。エペソは大分いいけれども。テサロニケというのは非常に模範的な教会なんだ。非常に激賞している。

3 **我らの勧は、迷より出でず、汚穢より出でず、詭計を用いず、**

もちろんです。そんなことは、パウロは一々言う必要はないんだけれども。

4 **神に嘉せられて福音を委ねられたる者なれば、人を喜ばせんとせず、我らの心を鑒給う神を喜ばせ奉つらんとして語るなり。**

第４節は非常に大事な節です。私は今日、「パウロの伝道の精神」と題に出しましたけれども。

「神に嘉せられて福音を委ねられたる者」

神さまがよしとしてくださった、そういう福音を委ねられた者ということ。福音にも、観念的なものも、ご利益もあれば、偽りもあれば、キリスト教の名を借りたとんでもない奴もある。

「我らの勧は、迷より出でず」

の「勧め」という言葉は「パラクレーシス」という字で、これは大いに励ます、激励する意味です。

「人を喜ばせんとせず」

人を喜ばせようとしているのではない、と。「福音」というと、聞いた方では喜ぶ。自分のためというような、「救は自分のため」なんて思ったら、これはヘタすると御利益になる。

「救は神のため」

なんです。我々が救われるのは、

「神の栄光の現れるため」

です。もちろん、我々が救われたということを、感情的に喜んで悪くはないけれども、それが目的ではない。

「御意の成らんこと」

が目的なんだ。だから、人を喜ばせようとしているのではない。

「我らの心を鑒給う神を喜ばせ奉つらん」

という。「神の喜び」というのは、本当の生きた真理の現れ。神の喜びの最たるものはキリスト自身です。イエス・キリスト自身が神の喜びです。

「我、なんじを悦ぶ、なんじを愛しむ」

という言葉が出てきたでしょ、キリストが洗礼を受けたときに。あれが神の喜びなんだ。その喜びも、キリストの姿は平伏（ひれふ）しているわけです。

とにかく、平伏しのないところには本ものは来ない。新約聖書を、福音書を読んで、降参して平伏すと、その世界に入れる。

「これはどういう意味か？」

なんて考えたり、研究したり、そんなことで入れるのではない。

●召団・主属

「教会」という訳は本当はおかしい。これは本当は間違っている。英語の「チャーチ」、ドイツ語の「キルヘ」という字は「キュリアコス」というギリシア語からきている。キュリアコスというのは

「主の属（もの）、主に属するもの」

という意味なんです。「キュリオス」とは「主人」という字で、「クロス」「権威」という字からきている。キュリオスというのは

「権威ある者」

という意味で、本当の権威をもっている者のことです。封建時代の人間的権威とは違う。神さまのもっている権威です。クロスからキュリオスという字ができて、それから、キュリアコスという、チャーチ、キルヘという字ができた。だから、本当は「主属」、主に属するものなんだ。

「エクレシア」という字は、神さまに

「呼び出されたもの」

という意味です。だから、「教会」という字にキュリアコスとエクレシアの二つあるわけです。

藤井先生が「エクレシア」を

「召団」

と訳した。神に

「召されたる者の団体」

です。やっぱりもう、言葉の上からも改革しなければいつまでたってもダメなんです。だから、テサロニケ召団、テサロニケ主属なんだ。「主属、主のもの」という意味です。

日曜日のことを「ヘーメラー　キュリアケー」「主日」というでしょ。キリストの復活なさった日です。だから、「教会」なんていう字はおよそおかしい。一般的に「教会」と言っているけれども、本当は召団、主属なんだ。キリストの属（もの）なんだ。そういう意味で、本質的な自覚をもたなければいかんわけです。

福音は

「喜びの音信（おとずれ）」

という。神の喜びであり、人を神さまは喜ばしてくださる。それが喜びの音信だ。どこまでも、主体は神の側にある。神・キリストの側に主体がある。我々は客体なんだ。受け身なんだ。受身的存在だ。だから「信受」なんだ。「信仰」ではない。受けるんだ。まことととして受けとる。だから、楽なんですよ、受けとればいいんだから。全身で受けとらなければダメですよ、手で受けとるくらいでは。存在的に受けとらなければ。だから、喜びは全身的な喜びになる。受けとって、そして、この喜びと同時に、神さまを、聖名を讃美するわけです。感謝も、歓喜も、讃美もみな一列になる。本当の真理の世界はみんな有機体的になっている。バラバラではない。

●涙の人 賀川豊彦

賀川先生は本当に何世紀に一人という人だね。私は賀川さんに本当にこの頃、魅せられている。今まで本当に読まなかったのは申し訳なかった。賀川先生の「房窓七吟」という和歌に、

読みて泣き泣きて繙（ひもと）く聖き書（ふみ）
　十字架の主に励まされつつ

賀川先生は本当に涙の人です。感動すると、よく涙を流す。伝記を読んでもよく分かる。非常に知性も豊かであると共に、情感もまた豊かな人だ。それから、意志も強い。知情意が渾然とした人だ。

首かかえ涙の池に溺る時
　キリストを見ぬ我が体の中

非常に涙を流して、自分の涙に溺れてしまう。その時にキリストを見た。それは、自分の身体の中にキリストが見えた。これは凄い体験です。うずくまって祈った。滂沱（ぼうだ）と涙を流した。そしたら、自分の身体の中にキリストの居ることを見たという。これは形容詞ではない。本当の体験です。

甦れ破れし霊よ甦れ
　キリスト汝に将（まさ）に生くれば
監房の一杯の水つくるとき
　涙にむせぶうつせみの世に

賀川さんという人は決して人を怨まない。そして、キリストのように、幼子を本当に愛した。獄舎の随分ひどい仕打ちを受けても、決して怨まない。本当に愛の人だ、賀川さんというひとは。普通の言葉で愛なんていうのとちょっと違うんだ、存在的な愛だ。もう、内村鑑三なんていうのとおよそ違う。私は無教会に育ったから、内村鑑三というのは或る程度尊敬していたけれども、それは全く或る程度だ。全面的に尊敬せざるを得ないのは賀川さんです。この人はキリストの愛の権化だ。そして、世界の情勢をみるのに非常に鋭い眼識をもっ

ていた。預言者でもあり、使徒でもある。沖縄がどんなことになるか、彼はもう既に、第二次戦争のことを予見している。日本の軍部がひどいから、

「天皇陛下も軍部に対してどうにもならないでおられる」

と。非常に平和のために尽くした。それは空しかった。実を結ばなかった。彼はルーズベルトに直接に言ったからね。その点で、彼は恐いものはない。愛は最大の力です。

そして、賀川さんは新川の貧民窟の幼子に本当に慕われた。だから彼は、

「教育の一番大事なのは幼児教育だ。保育園、幼稚園、小学校、その時代に本当に宗教的な雰囲気を入れてやらなければダメだ」

と言っている。要するに、幼子、童子、学童です。もう中学以上はダメ、小学校まで。その教育を間違えたらもうダメなんだ。本当に賀川さんの言うとおりです。その大間違いをやっているんだ、日本では。

「キリストが身体の中にいた」

なんていうのは正にヨハネ伝15章だ。

「居れ、連なっていろ。宿れ、一つになっていろ」

と。「しんこう」は仰ぐ（信仰）ではなくて、交わる世界（信交）、行く世界（信行）です。

十三通パウロの書を読み終えて
　忍耐せよと我叱咤さる

「忍耐せよと私は怒られた」

と。パウロさんと賀川さんは本当に魂が一つとなっている。

●内的霊的行為

パウロは、

「信仰のみ」

と言ったでしょ。ルターも。ところが、「信仰のみ」と言った人が一番行為的なんだ。

「信仰と行為」

なんて言っているのではない、「信仰だけだ」と。ところが「信仰のみ」という、信仰自身が霊的行為なんです。信仰というのは心理的な状態ではない。大体みなそう思っているが、信仰というのは霊的な行為、内的霊的行為です。信というのは存在的なんです。非常に力強い存在的なものです。存在的にキリストと一つになっている世界がこの信の世界です。だから、これは真（まこと）なんだ。

「未だ見ぬものを真とする」

と、パウロはヘブル書で言っているけれども、そうじゃない。現実、現（うつつ）なんだ。信即現なんだ。空気を私たちは信じていると言ってもいい。空気を本当に受けとっている。空気を受けとって、空気に包まれている。

「キリストは至るところにいる。遍在している、貫在している、内在している」と、これはエペソ書の中の言葉です。だから、不可離の世界なんだ。

「こっち側がどうこう」なんていうことではない。圧倒されている世界。神さまの方から、キリストの方から圧倒している現実です。逃げようがない。

「私の信仰は…」なんて言っているヒマはない。そこまでの境地にきたら、もう楽で力が来てしょうがないですよ。本当に、楽で力がきてしょうがない。そういう、力強い存在が土台になっているから、これが信の世界だから、それは必ず行為に展開していく。行為ならざるを得ない。それ自身が行為だから。

だから、ゲーテが、あのファウストをして、

「初めに言が在った」

というのを、

「初めに行為が在った」

と訳させた。さすがはゲーテだ。凄いやつだ、でっかい魂だ。漱石あたりはとてもかなわない。

「最初に行為が在る」

と。天地創造は全部、行為ですから。言葉と行為は即している世界です。言、即、行、言、即、力なんだ。だから、

「我が言は霊なり、生命なり」

という。霊なり、生命なり、力なり。跛者に

「立て！」

と言えば、立ってしまう。按手そのものが行為ですから。

●神の生命が交流

伝道は、我々はこうやって集会していることは、非常に大事なことなんです。神の力が生命が光が交流しているんだ。書かれたものは二段構えになっている。だから、書かれたものを読みながら、その言葉の文字の背後からの響き、力、光、これを受けとらなければ、読んでいるということにならない。単なる意味ではない。第一等の文学は、ダンテでもゲーテでも、彼らの文字には力がある。頭でひねくりだした文字ではないから。

或る人が賀川さんの本のことを

「魂を揺さぶる書物である」

と言った。賀川さんの名著の一つに、『魂の彫刻』というのがある。これは幼児教育のことが、教育の土台のことが書いてある。そして、賀川さんは非常に自然を愛した。

「子供たちがこの美しい自然を悦ぶようなことにしなければダメだ」と。可愛そうだよ、今の都会の子供は、そういった自然と接しないから。田舎に行くことも大事なんだ。ところが、田舎がまた都会化したらしょうがない。今、日本は一番ダメではないですか。いろんなことが狂っている。

文部省なんてのは、司法省と同じように独立して、文部大臣は本当の見識のあるひとがなる。政治家が大臣になったってダメなんだ。もう、日本というのは大改革をしなければダメだ。

「受験、受験」

なんていう、そんな学校制度ではダメ。たくさん、塾みたいな学校を造って、

「さぁ、お入りなさい」

と、中で鍛えればいい。中で鍛えて勉強しなかったら、

「出ていってください」

と。そういうことにしなければダメなんだ。大改革をしなければダメだ。福音の真理には恐いものはない。

5**我らは汝らの知るごとく何時（いつ）にても諂諛（へつらい）の言を用いず、事によせて慳貪（むさぼり）をなさず**（神これを証し給う）6**キリストの使徒として重んぜらるべき者なれども、汝らにも他の者にも人よりは誉（ほまれ）を求めず、**

毀誉褒貶は眼中にない。賀川さんがそういうひとでした。パウロももちろんそうです。誉められれば、悦ぶのは人の普通の感情だけれども、それを求めていたらダメなんだ。けなされても、

「ああそうですか」

で結構なんだ。まともに喧嘩する必要はひとつもない。次元の違ったところに来ているから。同じ次元にいると、何だかんだとゴタゴタしてしまう。次元の違ったところに行くと、「ああ、そうですか」と。みんな「ああ、そうですか」で結構だ。

「ああ、そうですか、お気の毒さま」

と、相手が気の毒になる。人を非難したりするのは、お気の毒さまだ。

7**汝らの中にありて優しきこと、母の己が子を育てやしなう如くなりき。**

「父」と言ったり、「母」と言ったりしているね。「そうだったろう」と。

8**斯く我らは汝らを恋い慕い、なんじらは我らの愛する者となりたれば、ただに神の福音のみならず、我らの生命をも与えんと願えり。**

「お前たちのためには生命を失っても差し支えないと、それくらいに思っているんだぞ」

と。本当の愛はそうだね。

「愛は死よりも強い」

という。雅歌書にも書いてある。

「大水もこれを流すこと能わず。いろんな宝と替えようとしたら、愛そのものにあざけられる」

と。「愛は奪う」なんて誰かが言ったがそうじゃない。

「愛は与える」

んだ。奪う愛はとんでもない愛だ。愛は与える。その最大なものはキリストです。我々に永遠の生命を与えてくださった。

「罪を贖い、敵をも愛する」

というのはそういうことなんだ。救い上げることだ。これは最強のものです。神・キリストの愛にかなうものはない。サタンなんか問題じゃない。パウロは遠慮なく書いているわけだ。

●信愛関係

9 **兄弟よ、なんじらは我らの労と苦難とを記憶す、われらは汝らの中の一人をも累わすまじとて、夜昼工をなし、労しつつ福音を宣伝えたり。**

パウロは幕屋造りをやりながら伝道したということです。

10 **また信じたる汝等にむかいて、如何に潔く正しく、責むべき所なく行いしかは、汝らも証し、神も証し給うなり。**

実存が本当に「宗教的、道徳的に間違いなくやってきたつもりだ」ということ。

11 **汝らは知る、我らが父のその子に対するごとく各人に対し、**12 **御国と栄光とに招きたもう神の心に適いて歩むべきことを勧め、また励し、また諭したるを。**

「ご存じのとおりでしょう」

と。パウロの伝道の精神が、今読んだところに出ているわけです。非常に愛した。相手が素晴らしいから愛した、という面もあるでしょう。けれども、どっちみち、パウロはこのキリストの愛で相手を溶かしていく、化していく。特にテサロニケは素晴らしい相手だから、パウロがテサロニケを愛する、その信愛関係は素晴らしかった。

「信愛」という言葉は、本当は「愛信」なんだ。我々は神・キリストを、この罪びとを愛し給うところの愛を受けとるから、信ぜざるを得ない。愛信関係なんだ。神・キリストの愛が土台です。これが先です。しょうがない奴を愛してくださった。だからもう、これは信ぜざるを得ない。また、愛せざるを得ない。こっち（我々）の方へくると、信愛でいいよ。信じ愛する。信ずることが神・キリストを愛すること。

「心を尽くし精神を尽くし思いを尽くして、神を愛せよ」

と、キリストが言われた。「愛せざるを得ません」なんだ、本当は「愛せよ」ではない。

「愛さないではいられないだろ」

と。「愛せよ」なんて言われると、
「果たして、私は愛せるだろうか？」
なんて、私は無教会時代に困ったよ、
「神を愛せよと言ったって、さぁ、これは困ったな」
と。「愛せよ」とは、
「この愛を受けたら、愛せざるを得ないだろ」
ということなんだ。
「愛せざるを得ないだろ」
と言ってくだされればよかったんだ。何でも、律法的に解釈したらダメです。そこは福音の世界だ。喜びの音信は、みんな反射、リアクションなんです。
「リアクション」
ということはダイスマンという人が言っているけれども。「アクション」が上から来ると、これがリアクションで反射する。

●預言者・使徒

13斯てなお我ら神に感謝して已まざるは、汝らが神の言を我らより聞きし時、これを人の言とせず、神の言として受けし事なり。これは誠に神の言にして、汝ら信ずる者のうちに働くなり。

そのとおりです。彼は神さまの代言者なんだ。キリストがまた神の代言者です。代言者だけれども、内容は即神の言だ。ということは、聖霊によっている。パウロは「聖霊」ということを言わないけれども、聖霊の力、内容によっているから、神の言、キリストの言、聖霊の言というわけです。

14兄弟よ、汝らはユダヤに於けるキリスト・イエスにある神の教会に倣う者となれり、彼らのユダヤ人に苦しめられたる如く、汝らも己が国人に苦しめられたるなり。

異邦人の、他のご連中に苦しめられる。テサロニケ教会の人たちも、もちろんノホホンとしているわけではない。そのようにして不信者の方からは攻められたり、またユダヤ教の奴らにも反抗されたりしていたことは事実なんだ。けれども、決してそれで動じない。

15ユダヤ人は主イエスをも預言者をも殺し、我らを追い出し、16我らが異邦人に語りて救を得させんとするを拒み、神を悦ばせず、かつ万民に逆い、斯して常に己が罪を充すなり。而して神の怒は、かれらに臨みてその極に至れり。

あい変わらず、これをやっているわけだ。15、16節で、パウロはイスラエルのユダヤ人のやっている事を、もう既に先の先まで言っているわけだ。
本当のクリスチャンは本当の預言者であり、本当の使徒である。両面をもっている。これは、

賀川さんを読んではっきり思った。内村先生は、どちらかというと、預言者の角度が強くて、使徒的な方面が少し弱い。聖霊の面の自覚が足りなかった。

「御霊の愛」

ということは、手島さんが言った言葉で、これは全く名言です。私は一番先にそのことを彼に言った、

「誰も言わなかったことを貴方は言った」

と。けれども、手島さんは私の「無」の本当の現実は結局、分からなかったね、

「無即無限無量」

の世界を。本来、宗教的に恵まれた人だからね、あの人は。

パウロがテサロニケ前書の2章の15節で言った通り、これがユダヤ人のあい変わらずの姿です。

「このユダヤ人を救うためには、私はキリストにすてられても」

と、パウロはロマ書の9章で言っているでしょ。

「自分はそのようなユダヤ人のチャンピョンだった。それがキリストにひっくり返されたから、どうしても受けとらなければダメだよ」

と言っているわけです。

「ユダヤ人が自分達は間違っていたと言ってひっくり返る時が世界の歴史の終りだ」

というようなことを預言している。

「イスラエルの国ができた」

なんていうことはどうでもいいんだ。新天新地には、神の国には国境なんかない。

●ディバイン・リベンジ

私の詩の中にはそれが出てくるから。国境なんかありはしない。民族のそれぞれの特色は、いい意味において甦りますけれども、国境はない。どこを探しても国境はない。

「世界連邦」

ということを言いだしたのも賀川さんです。ソ連時代にフルシチョフというのがいた。あれは

「軍備全廃」

ということを一遍言ったことがある。エライ事言うなぁと思った。まだどこもフルシチョフの軍備全廃までこない。神の国が来るまでは、人間の世界はドラマチックな構造だよ、仕方がない。

17 **兄弟よ、われら心は離れねど、顔にて暫時（しばし）なんじらと離れ居れば、汝らの顔を見んことを愈々（いよいよ）切に願いて、**

パウロは、いい意味における人間的なことを言っている。

「心は一つだけれども、顔と顔とはあい見合わせたいものだねぇ」

と。

18 **（我パウロは一度ならず再度までも）なんじらに到らんと為たれど、サタンに妨げられたり。**

この「サタンに妨げられたり」とは、具体的にどういうことだかは、注解書でも「分からない」と書いてある。

私の兄貴も「サタンに妨げられて」あのような運命になってしまった。その兄貴のために、私は詩の上で

「ディバイン・リベンジ」「神聖なる復讐」

をしてやる。この世で十字架を負った人たちは、天界では素晴らしいところに置かれるわけです。

19 **我らの主イエスの来り給うとき、御前における我らの希望、また喜悦、また誇の冠冕は誰ぞ、汝らならずや。**

「お前たちは私たちの本当に喜びであり、誇りであり、冠だぞ」

と、非常にパウロはテサロニケの召団のご連中を喜んでいる。

20 **実に汝らは我らの光栄、我らの喜悦なり。**

こんな教会はなかなか無い。相対的にいって、日本の明治からの歴史では、霊南坂教会というはなかなか素晴らしい教会だそうだ。

無教会はいつまでも無教会なんて言っていたらダメだ。無教会ではない。

「キリストの身体」

なんだ。非常に個人主義的になってしまった。だから、内村先生が終りになって、

「君たちの言っているような無教会ではないぞ、私の言っているのは」

なんて言った。塚本先生が『無教会論』というのを書いた。それが余り過激なものだから、内村先生は怒ってしまった。

キリストの属、聖霊のもの、これが本当のエクレシア、召団、キュリアコスの意味内容です。教会というのはそういうことです。

神・キリストとの関係は愛信関係、それが今度は、お互いが信愛関係になる。我々はまた、私もあなた方と、その意味で信愛関係であります。人間のお互いさまの欠点なんてことは問題にしないで進んで行く。お互いにおいてキリストの愛を貫いていく。こういうわけです。有り難うございました。